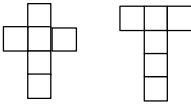
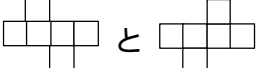


今年の5月の終わりに、久しぶり子どもが学びを創っている授業を参観した。5・6年生複式の算数科授業だ。5年生「四角形」、6年生「直方体と立方体」と図形領域の学習だった。複式授業のため、当然であるが教師の各学年の子どもへの直接的な指導時間は半減する。そのため、子どもたちだけの学習が展開されることになる。

本学級の6年生は3人である。第一次(2時間)で直方体と立方体の意味や構成要素を学び、第二次(2時間)では見取図と展開図を学んでいる。前時は、直方体の見取図と展開図をかいいたり説明したりしている。本時(2/2)は、「前の時間に直方体を開いたよね。今日は3人で相談して、サイコロの形をたくさん見つけて立方体の展開図を考えよう」との教師の指示で学習が始まった。

3人は、ホワイトボードに書き始める。R児は、まず次の展開図

 を書き、向かい合う面と面を意識していた。多分、直方体の展開図は、長方形と正方形との違いがあるから区別がしやすかったと思われるが、今回は正方形ということで、書いては消し、消しては書いていた。M児は、
 と
 が同じかどうかを考えていた。N児は、R児の書いているのを見ながら、
 を考え出したが、果たして展開図として成立するか迷っているようだったが、先生の「斜めはなし」との声で、吹っ切れたようだった。

R児「ここここ」N児「どう?」R児「だめ、かぶるじゃん」R児「消さんで～」の会話も、実に温かい感じがした。R児は多分算数が得意なのであろう、M児に「それ、できるよMちゃん」と励ましの言葉も添えていた。結局、R児は、考えた展開図に右のように命名をしていた。教師の「残り1分になったから、教えようか」という問いかけに3人は一斉に「やだー」と言った。この3人の追究のエネルギーの増強と継続によるものだと思うが、なぜ切れなかったのだろうか。単元の構想と子どもの理解・算数科の一人ひとりのとらえがマッチしていたのもあるだろうが、一番は、学級内の人間関係だろう。話しやすい雰囲気や考えやすい学級にみんなが作っているからではないだろうか。やはり、子どもが没頭する授業をみた後は気持ちいい。3人の子どもたちに感謝である。(芝)

